

經濟の場所としての日常

—マックス・ウェーバーにおける經濟および經濟學—

青山秀夫

序

本稿は、副題のとうり、經濟および經濟學に關する Max Weber の見方をとりあつかう。彼のこの見方は、彼の社會理論のいわば底流として、その理解のために大切である。しかし、それだけではないと私はおもう。Weber は經濟の中からだけでなく、經濟をいわば人間の生全體の中に位置させた上で、内外兩面からこれについて思索した。また、現代の經濟だけでなく、長い人間の歴史の流れにおいて經濟を見た。恐らくそのためであろう、この彼の見方は、その廣さと深さにおいて、それ自體としてきわめて有益であるようにおもわれる。以下の議論を私自身の見解として積極的にのべたならば、一層明快な説明ができたかもしれない。しかしここでは、さしあたり、こういう考えを Weber の敘述から掘出すという形をとった。このため讀者に御迷惑をおかけしそであるが、おゆるしいいただきたい¹⁾。

I 「聖」と「俗」

聖 (heilig, geistlich) と俗 (profan, weltlich, säkular) との間のするどい、相互排除的な區別を、Emil Durkheim があきらかにしたことは周知のとうりである²⁾。すでに幾たびかのべたように³⁾、社會(すなわち、此世 die Welt)の考察の出發點を宗教倫理的價值理念(特にあの「山上の垂訓」が示すような福音書の倫理)にとった

1) しかし他面で、この小稿の考察を、歴史と社會とに關する Weber のあの廣汎かつ體系的な思索の大きな枠にはめこんで利用できる、という利益がある。

2) デュルケム著・古野清人譯「宗教生活の原初形態」(岩波文庫)上巻 p. 70. 以下。

3) 拙著「マックス・ウェーバー」(岩波新書)参照。

Weber においては、當然この區別はその社會理論を強くつらぬいている⁴⁾。あきらかにこれは、彼の社會理論および經濟社會學の一つの大きな特徴であるが、ここではこの特徴から出發して、經濟および經濟學に關する彼の見方をあきらかにしてゆきたい。

もちろん、「聖」なるものが宗教と密接不可離である。ところで、Weber で大切なことは、彼が「日常」(Alltag)⁵⁾にむすんでこういう範疇を考えている點である。「宗教的状態と世俗的状態との區別は、前者の非日常性 (Ausseralltäglichkeit) をとうしてのみ、存在する」と Weber はいふ⁶⁾。世俗的なるものは「日常」に關し、「此世」は日常のいとなみの場に他ならない。この日常を超越したところに、宗教固有の「聖」なる世界があるわけである。(いわゆる「既成宗教」化にともなう「墮落」をカリスマ⁷⁾の「日常」化として考えるのも、この意味からである。)

こういう非日常的・非凡な「聖」なるものに對

4) これと平行・交錯しながら、情緒的 (emotional) と理知的 (rational) との對照、有情者的 (persönlich) と没主觀的 (sachlich) との對照、非凡な達人 (Virtuose, Held) と平均的な凡夫 (Masse) との對照、責務 (Pflicht, Sollen) と欲求 (Interesse, Wollen) との對照などが、基本的觀點として、その體系を縫っている。

5) 「日常」とは何か。分析的認識は別として、既にそれはわれわれに既知なるはずである。以下この言葉を、それ自體熟知されており、反省をとうして分析さるべき概念として、利用する。

6) 「宗教社會學論文集」第1巻, S. 250. 「經濟と社會」 S. 227. なお ausser alltäglich なものは「非凡」でもあろう。

7) カリスマ、豫言のカリスマ的性格、これにちなむ事柄など、既知として説明をすすめる。手近かな説明としては上掲の岩波新書の拙著を御覽いただきたい。

する價值感覺ないし價值理念の上に、あの宗教の世界がきずかれる。こういう宗教の世界は、一方においては、原始的呪術から佛陀・キリストのそれのごとき豫言者宗教に達しさらに此世における「呪術の克服」(Entzauberung)にいたるまでの純化・合理化の過程において、他方においてまた、さまざまな客觀的制約と交錯しつつこういう觀念の發展に刺激されて演ぜられるとりどりの社會的變化を通じて、それぞれ時と處とに應じて、きわめて多彩な姿をとって現象する。これを(特にヘブライ・キリスト教西洋・インド・中國などについて)具體的に分析し、さらにその内部を貫徹する固有法則性を究明し、これとむすんで分析に必要な概念圖式を構成することが、彼のあの宗教社會學の仕事であった。もちろんここでこの宗教社會學上の業績を立入るのべることにはできない⁸⁾。われわれには、「聖」に對して逆の側面をなす「世俗的なるもの」が重要である。Weberにとって、「經濟がある場所」(Stätte der Wirtschaft)⁹⁾はこの日常の世俗に他ならなかったからである。

さて呪術より豫言にいたる宗教倫理の發展は、他の機會に論じたように、一方では、同胞愛における「同胞」の範圍の擴大であり、他方では、倫理の儀禮から心情倫理への熔融である¹⁰⁾。こういう心情倫理的な「愛の普遍主義」(Liebesuniversalismus)は、それぞれ色彩と方向とをことにしながら、おそらく一切の豫言において見出されるであろう。しかしここでは、便宜上、福音書、特にあの「山上の垂訓」にとかれたごとき倫理を念頭におきながら、話をすすめたい。

さて、當面の問題の性質上、われわれは山上の

垂訓の一節をとり上げて考察しよう。

「野の百合は如何にして育つかを思え、勞せず、紡かざるなり。されど我なんじらに告ぐ、榮華をきわめたるソロモンだに、その^{よそお}服裝この花の一つだに及かざりき。今日ありて明日爐に投げ入れられる野の草をも神はかく^{よそお}装いたまえば、まして汝らをや。……さらば何を食ひ、何を着んとして思い煩うな、……まず神の國と神の義とを求めよ、さらば凡てこれらの物は汝らに加えるべし。この故に明日のことを思い煩うな。明日は明日みずから思い煩わん。」

この言葉が如何につよくわれわれの胸をうつとしても、また、正義と愛とのための神の言葉であるとしても、この命令のとうりに日常を持続的にいとなむことがわれわれ「凡夫」にできるであろうか。

われわれは女房子供をかかえて「世帯」で毎日をくらしている。しかし世帯をもって「何を食ひ何を飲み何を着んとし思い煩わぬ」ことができるであろうか。世帯をもった大衆が、一般に、まず求めるのは、むしろ、くらしをよくすること、「安樂」にくらすことである。すなわち、安心して(持続的に不安なく、すくなくとも平常どうりに)楽しく(まず衣食住に事缺かず)日常の生活をおくることである。かくて世帯の配慮は必然的に forward-looking, vorsorglich たらざるをえない。そこでは「明日は明日みずから思い煩わん」というような暢氣なことはもはやゆるされない。むしろわれわれの知性——知慧・才覺——は、現實においては、こういう世帯(あるいはそれに類似したもの)のために、もっとも精力的に、つかわれそうである。それゆえにこそ、キリストは、「出家」をといて、「人の仇は、家の者たるべし」といったのであろう。それゆえにこそまた、キリストにとっては「世の心勞と財寶と快樂と」が支配する世界は信仰のために土のすき礮地なのであろう。しかしこの世界にこそ、凡夫の大衆のくらしのセンス・世帯のセンスはすんでいるのである。

「山上の垂訓」から出發してかように考え來った場合、「聖」と「俗」との區別、あるいは、「世俗的なるもの」「此世」「日常」の意味は容易に感得

8) この方面の業績としては、「宗教社會學論文集」3巻の他、「經濟と社會」第2部第4章「宗教社會學」がある。概していうと、前者が具體的例示的なものに対して、後者は理論的體系的である。

9) 「宗教社會學論文集」第1巻 S. 261.

10) 上掲の岩波新書の拙著で論じたように、かように呪術と豫言とを對照的に分析する點で、Weberの理論は H. Bergson のそれ(「道德と宗教の二源泉」)と深い平行を示している。これは恐らく、Weberの社會理論の根柢に、Bergsonのそれに似た、意識の分析圖式が伏在しているためであろう。もちろんここではこの點まで立入ることはできない。

されるであろう。すくなくとも、當面の問題たる經濟に關して必要なかぎりにおいては、明瞭となるはずである¹¹⁾。

ところで Weber は、この此世的・日常的なるものにおいて經濟をとらえようとしている。また、經濟と合理主義との間の關係もかような根源的連關において考えられている。なるほど Weber は、正面から、こういう經濟の見方を展開してはいない。しかし、この見方は彼のさまさまの仕事のなかで重要な役割を演じているし、したがってまた、彼のあちこちの敘述から掘り出すことができる。さらに、彼の業績の理解ということも離れていっても、この彼の經濟の見方はそれ自體われわれに教えるところきわめて多い¹²⁾。以下、やや煩わしいが、彼の敘述にもとづきながらこの彼の經濟の見方をあきらかにしよう。

II カリスマとの對比における 「經濟の精神」

さてこの「經濟の精神」についていちばんはっきり彼がのべているのは、カリスマ的集團の生活を論じた場合である。やや長いが彼の言葉をそのまま引用しよう。

「決定的な事情は、およそありとあらゆる合理的な經濟を、カリスマは品位なき (würdelos) ものとして否定することである。『家長制的』構造は、『家計』のととのった基礎 (geordnete Basis des „Haushalts“) に依存するが、カリスマの一切の家長制的構造に對する峻烈たる對立は結局上記の點にある。

純粹なる形態におけるカリスマは、その擔い手にとって給付と反對給付との交換の形ちの經濟的

利用の意味における私的營利源泉でもなければ、また、勤務の報酬の獲得という意味における私的營利源泉でもない。さらにまた、その集團の物的需要の充足のための徵稅秩序というごときものも、それは知らない。むしろ、それが必要な手段を調達するのは、集團が平和的な〔例えば純粹宗教的集團〕の場合は、個人的な保護者とか、それに心傾ける人々からの尊敬の贈物・寄進その他の自發的給付とかによってである。英雄の戰鬪的カリスマの場合には、強力行使の獲物が、同時に、集團の目的とも物質的給養手段ともなる。

純粹カリスマは一切の家長制的支配に對立している。それは、一切のととのった經濟の反對物 (der Gegensatz aller geordneten Wirtschaft) である。それは實に反經濟性の力そのもの (eine, ja geradezu die Macht der Unwirtschaftlichkeit) である。しかも、カリスマ的戰爭英雄のように、財所有を目指す場合すらそうである。

しかしそれがかくの如きものでありうるのは、それがその本質上決して持続的『制度的』Gebilde でなく、それがその純粹な形ちをとっているかぎり、その正反對のものであるからに他ならない。カリスマの擔い手は——首長〔豫言者または英雄〕たると使徒・追隨者たるとの區別なく——その使命を達成するためには、此世の軛の外に (ausserhalb der Band dieser Welt) の外に出なければならぬ。日常の職業および日常の家の責任の外に (ausserhalb der Alltagsberufe ebensa wie ausserhalb der alltäglichen Familienpflichten) 出なければならぬ。¹³⁾

かようにして、日常性・世俗性・大衆性・持続性・合理性などが經濟の基本的屬性として考えられる。周知のように、A. Marshall は “Political

11) 此世的・日常的ということが「大衆的」と深い親近性をもつものこのためである。「内此世的」(innerweltlich) という範疇についてもこの點が大切である。本稿にあまり關係ないが、序でに一言しておく。

12) この點ここでは立入って説明しない。ただわれわれ自身の體驗と觀察とを反省しよう。以下の經濟の見方が現實に密着しており、また、われわれの人間としての生活の問題に適切に即應していることが、恐らく、さとられるであろう。ここではそれだけで充分である。

13) 「經濟と社會」SS. 754—755, 760—761, 142. なお「暴力の行使は——言葉の通常の意味における——經濟の精神にあまりにも強くそむきすぎる。鬪争を通じて、直接に暴力を行使して財を奪ったり直接實力を行使して他人に或る行動を強制したり、することは、それゆえ、經濟行爲とはいわない。」(「經濟と社會」S. 30. 「宗教社會學論文集第1卷S. 4.」) という Weber の立場も、おそらく、上記の見解にもとづくものである。

Economy or Economics is a study of mankind in the ordinary business of life.” という言葉で彼の「經濟學原理」をはじめた。Weber はこの ordinary business of life に經濟の——彼にとって——本質的な特徴を見出しているといえよう。誤解をさけるために特に強調しておかねばならないが、もちろんそれは原始においてすでに明瞭に露呈されていたのではない。すでに論じたように、それは、彼のいわゆる固本法則性(Eigengesetzlichkeit)として、社會の近代化とともに漸次純化され、一層露骨に現象するにいたったものである¹⁴⁾。

しかしこの點についてさらに注意を要するのは、經濟の沒主觀性 (Sachlichkeit, Unpersönlichkeit)¹⁵⁾ である。Weber は、ほとんどつねに¹⁶⁾、宗教が經濟をその沒主觀性のゆえに (人間關係から情誼的關係をうばうがゆえに) 忌み、そこに相

尅の成立することをとき、更にまた、「合理的經濟は沒主觀的經營である」(Rationale Wirtschaft ist sachlicher Betrieb.) といっている。恐らくこの沒主觀性をも、合理性その他とともに、經濟の屬性と考えてよいであろう。しかし前近代においてはゲマインシャフト内部の經濟はつねに傳統と呪術とに制約され、有情者の關係のつよい浸透のもとにおかれていた¹⁷⁾。沒主觀的行爲としての經濟活動は、いわば cosmopolitan の世界たる市場において、商人的打算を通じて發展した。「市場がその固本法則性に放任されるかぎり、それはただ物 (Sache) の値打ちしか知らない。人 (Person) の値打ちは知らない。同胞愛の責任も内面からの畏敬の責務も知らない。有情者の共同體がになう土着原生的な人間關係もしらない。」「市場的結合それ自體は、人間がむすびうる實際的生活關係のうち、もっとも沒主觀的 (die unpersönlichste) なものである。」經濟の沒主觀化はこの市場の擴大強化によって強力に推進されてゆく、と Weber は見るようである¹⁸⁾。

III Weber における經濟の定義

Weber における經濟行爲 (Wirtschaften) の定義はつぎの通りである。

「〔經濟的志向性の定義、すなわち、廣義におけ

14) 經濟・政治・法・宗教・藝術などの個々の生活領域は、それぞれ、それ自身の“nature”ないし“logic”をもつ、と Weber はかんがえ、これをその生活領域の「固本法則性」(Eigengesetzlichkeit) とよんだ。この「固本法則性」はいわば超歴史的なものであり、古くから人間の生活を支配していたが、しかし最初はまだはっきりした形ちをとっていない。社會の近代化とともに始めてそれははっきりと露呈され (それが個々の生活領域の「合理化」である)、同時に、それぞれの間の相尅が蔽いがたい形をとる。かように考えて、Weber は、この「固本法則性」を中心に、個々の生活領域を分析するが、この點について詳細は拙稿「經濟社會學者としてのマックス・ウェーバー」(雑誌「經濟論叢」昭和 26 年 1 月)を見られたい。なお、限界效用理論について彼が「資本主義の時代の歴史的特性も、したがってまた、限界效用理論 (ならびに他の一切の經濟學的價值理論) がこの時代の理解に對して有する意義も、結局次の事實に依存している。すなわち、現實のこういう理論的命題への近似は、今日の生活條件の下では、たえず強まってゆく近似であったし、また、人類のうち運命がこの法則の支配の中に包みこまれる人々の範圍がたえずひろがってゆく近似であったし、さらにまた、見透しうるかぎりの將來において、この傾向の進行はなおつづく、(これに反して、人々が過去のさまざまの時代の經濟史を『非經濟性の歴史』Geschichte der Unwirtschaftlichkeit とよんだ場合、それは必ずしも誤りではなかった)、という事實に結局依存している。」(「學問論文集」S. 371.) というとき、やや大膽に言えば、彼はそこで經濟の世界の基本的な「固本法則性」を含意しているのである。

15) Weber が頻繁に使用する「有情者の」(persönlich)・「沒主觀的」(sachlich)の對概念については、拙稿「ビジネスの擁護」(雑誌「世界」1949年10月)拙著「マックス・ウェーバー」(岩波新書)で説明を加えた。ここではこれを前提しながら分析をすすめる。

16) 「經濟と社會」第2部第5章「市場」を見よ。この L. Goldschmidt, E. Durkheim, H. Havelin, 田中耕太郎博士などと關係をもつ (したがって B. Malinowski などと對立すると見られた)見方については、すでに拙著「近代國民經濟の構造」p. 102. 以下で可成り立入った。 (なお、E. E. Hoyt: Primitive Trade. Ist Psychology and Economics, London 1926. は Malinowski との間のこの對立を調停折衷せんとするところみである。)

17) 傳統や呪術に関する Weber の説明は概して descriptive であり、十分に analytical かつ explicit になっていないが、とりあえず簡單には、岩波新書の上掲拙著を御覽いただきたい。

18) もちろん Weber は、こういう世俗的な力の合理化作用だけで近代化がなしくずしにおこなわれる、とはかんがえない。

る「経済的」の定義]ある行為は、その背後にある意圖から見て、效用給付の欲求への配慮に向けられている(an der Fürsorge für einen Begehr nach Nutzleistungen orientiert)場合、そのかぎりにおいて『経済的に志向されている』(„wirtschaftlich orientiert“)という。

〔経済行為の定義〕経済的に志向されている行為にして、何よりもまず経済的に志向されており、しかも處分権の平和的行使であるものを『経済行為』という。特に、目的合理的に、したがって計画的に、経済的に志向されている経済行為を『合理的経済行為』という¹⁹⁾。

さて、この定義に関連して、ここに次の問題が生ずる。

先にわれわれは、Weberでは日常性・世俗性・大衆性・持続性・合理性などが経済の基本的属性として考えられている、といい、カリスマとの對照をつかってこのことを示した。ところで上記の定義のどこにこういう経済の見方があらわれているであろうか。

この點一層立入ってのべよう。——なるほど Weber は、この定義にあたって経済のセンスを重要視している。「経済行為の定義はできるだけ統一的でなければならぬ。したがって、一切のいわゆる『経済的』 „wirtschaftlich“ な事象・對象がまさにこの『経済的』という特徴をえるのは、人間の行為が事象や對象やに(目的・手段・障害・副次的効果などとして)あたえるセンス(Sinn)によってである、という事情に表現を與えねばならぬ。…『経済的』な事象は特有の共通の意味(Sinn)を帯びている。経済的事象の統一性を構成し、それを理解せしめるものは、ただこのセンスだけである。」²⁰⁾ かように彼が、その定義の仕方について、釋明しているのを見ても、このことはあきらかである。しかし、上記の定義の基底に、はたしてわれわれは、こういう諸屬性をもった経済のセンスを見出しうるであろうか。

なるほど Weber は、ここで、できるだけ廣汎に経済を定義しようとしている。「経済的に志向することは、傳統的な仕方で行われることもあれば、また、目的合理的な仕方で行われることもある。行為が相當徹底して合理化された場合にあってすら、傳統的に行爲を方向づける要素は相對的に重要である²¹⁾。」この事實は、經濟史家だけに、彼にとって無視できない意義をもつ。ただちに合理性の契機を、すくなくとも直接に、表面に出さないのは當然である²²⁾。しかしそれにしても、日常が経済の場所であるというあの着想は、この定義のどこに見出されるであろうか。

これは當然生ずる疑問である。しかし、注意深く見ると、この定義の中にも、やはり、Weberの上記の経済の見方が貫徹している。しかも、これを確めることには、單なる學說史的興味の満足以上の意味がある。この意味で以下このことをあきらかにしたいが、それにはまず、しばらく経済をはなれて、日常の妥協的性格のことから話をすすめるのが便利である。

それでは日常の妥協的性格とは何か。H. Bergson は人間の「安易な斜面にそうて滑ってゆこうとする傾向」について語った。この凡夫の世俗主義はいわゆる嚴格主義とは正反對のものである。Weber自身するすように、「[人間が信奉する]諸價值の間の關係は、究極においては、つねにどこでも、『神』と『惡魔』との間の、絶對に和解をゆるさぬ死闘である。それは單なる交替的可能性たるにとどまらない。如何なる相對化・如何なる妥協もその間には存しない。」しかし、「善き事につきて何ぞ我に問うが、善き者は唯ひとりのみ」「ただ然り然り、否な否なといえ、之に過ぐるは惡より出づるなり」として、かくのごとき價值のいずれか一つを固執して、ただそれのみに生きることがわれわれ俗人に可能であろうか。むしろ「現實

21) 「經濟と社會」 S. 35.

22) しかし Weber が „Fürsorge“ „Vorsorge“ などの表現をつかって「明日をおもいわずらう」ものとしての經濟の性格をとらえているのは見逃せない點である。恐らくこの表現のうちに、萌芽的傾向的形態におけるそれをもふくめて、此世に志向した知性の働きを託しているであろう。

19) 「經濟と社會」 S. 31. 拙著「近代國民經濟の構造」 p. 26. 「マックス・ウェーバーの社會理論」 p. 38.

20) 「經濟と社會」 S. 31.

の人間の重要な態度決定を仔細に見ると、その何れの一つの中にも、さまざまの價值領域が交錯し、からみ合っている。こういう價值の雜然たる混合は、心理的な事情と生活の必要とから生ずるわけであるが、とにかく安易に日常を過ごす人間はこういう價值の混合を意識しないし、特に何よりも、それを意識することをこのまない。安易に日常を生きる人間は、『神』と『悪魔』との間の選擇をさけ、競い合う諸價值のうち、神はその何れを握り、悪魔はその何れを握るかについて究極的態度決定を回避する。」これは「率直な知性的誠實の責務の回避」である。しかしこの點にこそ「日常の平板化作用」(das Verflachende des Alltags)はあり、また、われわれはそこに大衆の日日の営みとしての「日常」の特徴を見出さねばならぬ²³⁾。

側面をかえてこのことをのべよう。

眞實の戀愛ならば、戀人は一切である。それと比較しうる如何なる價值もない。如何なる「代用」も「競争」も不可能なはずである。いな、いささかの愛の逸脱に對してもつねにはげしい監視の眼がそそがれるであろう。しかしこういう場合は(持続的にはなおさら)まれである。相手の女は、美醜・賢愚・健康・出生・教養などの世間並みの尺度にあわせて採點され、「度盛表」に位置づけられ、同様に採點された他の女と「比較」して「選擇」される。相手の女は、物を好惡する場合と同様にして、値ぶみされるわけである。「人に對するすききらい」は、「物に對するすききらい」と對置してこれを純粹にかんがえるかぎり、かくのごときものではないはずである。しかしそれは、ちょうど密柑や林檎を比較選擇する場合と同様の仕方で、比較選擇される。「われわれが愛や或いは憎しみを感ずるとき、われわれが嬉しいとおもひ或いは悲しいとおもうとき、われわれの感情そのものが、それを全くわれわれのものである何にかにしている無數のそこはかとなきニュアンスと無數の深い共鳴音とともに、われわれの意識にやってくるであろうか。そうであったなら、われわれはみんな小説家でありみんな詩人であり、みんな音

樂家であるわけであろう。けれどもたいがいの場合に、われわれはわれわれの精神状態のうち、その外的展示だけしかみとめていないのである。われわれはわれわれの感情のうちその非個人的(impersonal)の面だけしか、——すなわち、何人にとっても、同一條件において、ほとんど同一であるがゆえに、言語がきっぱりしるしえた面しか——、とらええないのである。このようにして、われわれ自らの個人においてまでも、個性はわれわれをのがれ去る。われわれは一般性と象徴との中を動いているのである。」Bergsonが「笑」の中でかように美しく語るときも、彼はこの日常の性質に注意しているのである。

かようにして、愛や憎しみや心を動かす感情やからその客觀的非個人的な相しか固定しない「日常的知覺の通貨」(言語その他)によって、われわれの奥深い内面の捉え難い繊細な情緒をふみつぶすところに、われわれの日常生活は成立つ。かようにして、固定的共通的非個人的殘滓的な觀念と感情との厚い皮層が、ちょうどわれわれの地球において硬くて冷たい地殻がその内部にたぎり立つ金屬の火のかたまりをつつむように、人間の個々の情念の火を蔽うところに、われわれの日常生活が展開される。ところで、藝術がこの表皮をやぶって内面の生きた自我の共鳴をもとめるものであること、また、傳統への安易な依存に抗して「かく記されたり、されどわれ汝らにつげん」といって人々に直接呼びかけた豫言者たちも同様にこの意識の最深層における回心をもとめたこと、(さらに政治的活動も部分的にかくのごとき要素をふくむこと)をおもうならば、この表皮に安住する點に「日常」の特徴があることはあきらかである。(それゆえにこそ、純粹なカリスマは非日常的であった。)しかしそこでは、陰陽の電氣が、蓄電池の兩極の間において、互いに索引し合い、蓄積され、火花を迸らせるように、人間がその同胞に接觸して生れるあの索引と反撥、すなわち激情による均衡の破壊は、日常化がすすめばすすむほど、いよいよ弱まってゆく。かえってそこでは、あの非個人的な「日常的知覺の通貨」にもとづく功利主義的な比較と打算の上に、日常特有の勘定・取引・

23) 「學問論論文集」S. 469, 547, 555.

“give and take”・妥協がおこなわれ、生活の必要に即した安全と便宜とがもたらされる。これが上記の「日常の平板化作用」に他ならず、そこに日常の一つの重要な特徴が見出されるのである。

ここで問題を「日常」の分析から経済にかえそう。——ところで技術と経済とはどちらがうか。技術はすでに何らかの目的があたえられていることを前提し、この前提の下での手段の選擇がその問題である。経済の問題はこれとことなる。前以って一定の目的があたえられるのではない。手段と同時に目的も比較選擇される。これが経済の問題である。これが上記の問題に対する當然の、また、通説的な答えである。Weberもこの立場をとる。「経済は、幾つかの目的の間を先を見透しながら選擇すること (vorsorgliche Wahl gerade zwischen Zwecken) を意味する。ただし同時にそれは、この多数の目的のために處分または調達されうる手段が稀少なことに志向していることが必要である。」上記の點を強調して Weber もまたかように説いている²⁴⁾。

しかし、かように複数の目的を交替的可能性として并列する世界とは如何なるものであろうか。以上であきらかなように、それは平板化された日常の世界に他ならない。多数の目的の并列を経済が前提し、それによって経済が特徴づけられることは、経済が日常に住むことのあらわれである。

さらに一步すすめて、本節最初にかかげた Weber の経済行為の定義を、この觀點から考えてみたい。そこに「效用」(Nutzen, utility) の概念があらわれている。われわれは、以上の考えから、この效用を日常・此世にぞくする範疇として考ええないであろうか。

われわれはいま「人に對する好悪」と「物に對する好悪」とを對照したばかりである。この對照を徹底して純粹にかんがえるかぎり、前者は純粹に性質であり、もはや比較可能な分量ではない。(Bergson ならば「純粹持續」というであろう。) 效用は、比較可能な數量として、「物に對する好悪」の型にぞくし、したがって、さきに分析した意味

24) 「経済と社會」S. 32, 33.

で日常の世界の範疇である。Weber 自身、禁欲的プロステスタンティズムにおける「職業」の理念をのべ、それが(彼世における救極の非合理的要求に出發しながら、しかも)此世内部の比類なく勤勉かつ合理的な経済活動にみちびく所以を説明した場合、あたかもこの《Nutzen》を此世的性格を代表する範疇としてあつかっているが、それはこの意味からに他ならぬであろう²⁵⁾。

上記の考察からおもい出されるのは、あの有名な「目的合理的行為」のことである。最後に簡単にこの問題にふれておきたい²⁶⁾。

目的合理的行為の一つの重要な特徴は、輕重の比較がおこなわれうる複数の目的をそれが前提することにある。いうまでもなく、この點今のべたことがそのまま直ちに妥當する。特にいちばん純粹に「目的合理的」な場合については、すなわち、「行為者が價值合理的に『律法』ないし〔價值理念の〕『要求』に志向するのではなく、むしろ所與として主觀的な欲求の刺激 (subjektive Bedürfnisregungen) を、彼の意識において較量されたそれらの強度の度盛表の姿において (in einer Skala ihrer von ihm bewusst abgewogenen Dringlichkeit), とらえ、この順序においてできるだけ充足される方向に、その行為を志向せしめる (限界效用の原理)」場合については、このことはさらに特徴的にあらわれる。この意味から、「目的合理的行為」の概念は世俗、特に経済、と深い親近性をもつということが出来る。

IV 經濟理論と經濟社會學

經濟學と經濟社會學との關係は Weber ではどうなっているか。最後にこの問題をかんがえたい。

まず、經濟學を Weber はどう見ているか。

周知のように、Weber は、Lujó Brentano: Die Entwicklung der Wertlehre, 1908. の書評の形ちで、限界效用學說の方法論的考察を試みて

25) 「宗教社會學論文集」第1卷 S. 101. (梶山氏邦譯 p. 124.) なおここで Nutzen は、單に引用記號でつままれるだけでなく、gesperrt になっている。語感に注意をうながすためとおもわれる。

26) 「經濟と社會」SS. 12—13. 上掲拙著「構造」pp. 30—33. 「社會理論」pp. 31—34.

いる²⁷⁾。しかしここではこういう經濟理論の自律性の主張そのものよりも、むしろ次のような、經濟理論の對象の性質の説明の方が一層大切である。

市場における人間は、純粹な姿において考えるかぎり、「非情」であり、「沒主觀的」(sachlich)である。われわれはすでにこの Weber の見解を説明した。さて、Weber にしたがえば、かように沒主觀的・非情誼的なものとしての市場における諸事象の考察、それが經濟學 (Sozialökonomik) の課題であり、この意味において、かような純粹に沒主觀的な姿における市場的人間關係そのものの考察は、社會學の仕事の外にあると考えられる²⁸⁾。

われわれはここで、この Weber の經濟學説を補足するために、經濟理論の對象の性質についての F. H. Knight の見方を紹介したい。

の補足として役立つからである。さて、經濟理論の對象の性質に関する Knight の見方は次の通りである。

「經濟理論 (economic theory) は inter-individual な諸關係を取扱う。しかし、いわゆる “economic man” は『社會的動物』ではない。經濟的個人主義は固有の人間の意味における社會 (society in the proper human sense) を排除する。經濟理論があつかう個人間の關係 (economic relations) は沒有情者的 (impersonal) である。機能的に實在するのは、市場 (the markets), すなわち、交換の機會であり、他の人間 (other human beings) ではない。この關係は、完全に non-moral であり、non-human である。理論的にいえば、この關係は若干の未開民族の間の『沈黙交換』とまったく同様である²⁹⁾。

經濟理論が取扱う人間は完全に沒主觀的である。經濟理論はかくのごときものであり、かくのごときものとして充分に存在理由をもっている。Max Weber および F. H. Knight のこの考えに對し

て私は賛成である³⁰⁾。

純粹な市場における完全に沒主觀的な取引、われわれの經濟生活はそういう傾向はもつにしても、それがただちに現實ではない。市場に對する他の社會的 Gebilde の影響、さまざまの有情的關係の浸透、これが經濟の現實である。人間の世界の出來事である以上、經濟はつねにかくのごときものであるほかない。

かようにしてわれわれは、經濟を市場の出來事としてとらえると同時に、さらにまた、それを經濟の世界の出來事としてとらえなおさねばならぬ。ここから、經濟と社會との間の相互交渉の分析という、經濟社會學の課題の一つの (いちばん廣汎な) 規定がうまれる。³¹⁾

しかし、こういう課題の規定は消極的にとどまる。研究者の實際の研究活動のためには、問題をもっと限定することが必要である。Weber 自身もこういう限定の上にその仕事をすすめたとおもわれる。別に論じたように、彼は宗教倫理的價值理念を出發點におき、「近代合理主義の比較史的自叙傳」として歴史をとらえようとした。彼の實際の仕事も、宗教社會學の場合などと同様に、この問題の設定によって限定された。

しからは、かくのごときが經濟社會學の眞の理想的な體系であろうか。Weber 自身こういう要求をもたないし、また、この要求の角度から彼の業績を批判することは恐らく當を失するであろう。いずれにしても、彼の經濟社會學的業績は、すでにその問題において適切であり、その内容において高度に効果的であった。實際、これを超えうる、他の如何なる道があるであろうか。

30) ここで「經濟理論」(economic theory) といふときは、D. Ricardo の經濟原論、限界效用學説、L. Walras の一般均衡理論のようなものを念頭においている。A. Marshall “Principles of Economic.” が考えるような “economics” に いては、さらに、多くの附加的説明が必要であろう。

31) Weber 自身も、„Der Sinn der Wertfreiheit der soziologischen und ökonomischen Wissenschaften.“ (1917) では、この意味の經濟社會學をかんがえている (『學問論論文集』S. 501.)

27) この論文は、いま、彼の「學問論論文集」におさめられている。

28) 「經濟と社會」S. 364.

29) F. H. Knight: The Ethics of Competition and other essays, 1935, p. 282.